

『地域研究のためのフィールド活用型現地語教育』

平成 19 年度派遣報告書

—ケニア共和国・ナイロビ大学、スワヒリ語、H20. 2. 8-H20. 3. 31—

平成 19 年入学

大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

博士課程 2 回生

泉 直亮

自身の研究テーマについて

わたしは東アフリカの牧畜社会を対象とし、その社会変容の過程を、生態人類学・経済人類学的なフィールドワークによる調査の手法をもちいて解明することを、おもな研究目的としている。とくに焦点をあてるのは、市場経済や産業開発に対する地域住民の反応である。

冷戦体制の崩壊後、世界各地の経済体系は地球規模の市場経済に統合されつつある。東アフリカ牧畜地域の経済も、その一部として周辺部に包摂されている。1980 年代中頃以降、当該地域は度重なる旱魃と牛疫におそわれた。この窮状に対して政府や先進国の開発援助組織は、さまざまな開発計画を実施してきた。なかでも、各地に開設された家畜の定期市は、かれらの地域経済に転機をもたらしたといわれる。また、地域の生業牧畜を肉やミルクを市場向けに生産する畜産業に変化させるために、家畜の品種改良や病気のコントロール、組合の組織などがおこなわれ、地域の家畜飼養に対して、大きな影響を与えてきた。

地域住民がこうした事態にどのように対応しているのか、そして生業牧畜を基盤としてきた従来の経済と、地球規模の市場経済がどのように複合化しているのかを解明することは、アフリカ地域研究における重要な課題のひとつである。

研修言語の概要

スワヒリ語はアフリカ大陸東岸部で広く使われている言語であり、ケニア共和国、タンザニア連合共和国、ウガンダ共和国では公用語となっている。アフリカ大陸東岸ではアラブ人との交易がさかんだったが、スワヒリ語は、この地域でもともと使われていたバントゥ語がアラビア語の影響をうけて交易とともに普及した言語だといわれている。かつてはアラビア文字で表記されていたが、現在ではローマ字で表記される。

語学研修の内容について

わたしは研修言語のスワヒリ語に関して初学だったため、受け入れ機関であるナイロビ大学には適切な講座がなかった。したがって、わたしのおもな研修場所はナイロビ大学アフリカ研究所から紹介された現地の語学学校となった。そこは「ACK(the Anglican Church of Kenya) language and orientation

school」というミッション系の学校である。

そこでわたしは、ケニア人講師による個人授業のコースを選択し、英語を介してスワヒリ語を学んだ。当学校は独自のテキストとカリキュラムをもっており、体系的に文法を習得することがおもな研修内容だった。

1回の授業の概要は、おおよそ以下のとおりである。授業はまず簡単なスワヒリ語会話からはじまる。話題はさまざま、たとえばケニアでの生活や日本のこと、自分の研究テーマである。スワヒリ語の学習状況に応じて、英語でフォローする。

つぎに、前回の学習内容を復習する時間があり、その日に学習する項目が教師から解説される。ここでは、教師がホワイトボードに板書し、解説を加えるという形式がとられる。そして、わたしはその項目を確認し、活用するための練習問題をこなして、1回の授業はおわる。

教師は授業内容に関するわたしからの質問には、随時応じてくれた。また、ある程度の文法事項を学習し、語彙数が増えてきた研修期間の後半には、現地の小学生用のテキストを用いて、物語を講読することもあった。

研修期間中に印象に残った体験や経験

派遣先であるケニア共和国、とくにわたしが滞在していた首都のナイロビでは、英語がかなり普及している。ナイロビでの日常生活をおくるには、英語を話せば表面上は何の問題もない。

しかしわたしは、流暢に英語を話せる人たちに、あえてスワヒリ語で話しかけると、かれらの反応が英語で会話するときとはあきらかに違うことに気がついた。英語で話すときには、どこか事務的でよそよそしかった人たちが、スワヒリ語で話しかけたとたんに、うちとけて友好的になることがよくあるのだ。かれらはスワヒリ語ではなく英語で会話したほうがスムーズに情報を伝達しあえるとわかっているのに、わたしとスワヒリ語で話すことをうれしがっていた。

かれらはいくら英語に堪能であっても、英語は「外部から与えられた仕事をするこトバ」であり、それに対してスワヒリ語は「われわれのこトバ」であると思っているのかもしれない。

目標の達成度や反省点

今回の研修での目標は、これから現地で調査をすすめるために、スワヒリ語の基礎的な能力を身につけることだった。それは具体的には、文法事項の理解と平易な文章の読み書き、そして平易な日常会話の能力である。

研修をおえてわたしは、おおよその文法事項を習得した。そして時間と労力を惜しまなければ、辞書を用いて文章を読むことができるようになった。また語学学校の教師や地域住民と積極的に交流をはかったことで、ごく簡単な日常会話をこなせるようになった。

しかし現地滞在期間が予定より大幅に短縮されたことが一因となり、語彙力の習得が十分にはできなかった。そのため、読み書きと会話における流暢さと正確さに課題が残る。とくに流暢さが重要となる会話に必要な語彙力の習得が大きな課題である。この課題については、次回の現地調査までに、日本でスワヒリ語の語彙力の習得につとめることで補う必要がある。